

金住系 盤

COMPASS

http://www.hodoin.net

発行所: 東京都豊島区南池袋
一丁目十三番十六号
日蓮正宗法道院法華講
03 (3984) 2650

金儲けで始めた宗教出版

世の中には様々な種類の職業があり、人はその中のどれかを自分の職業として選択、従事し、その対価として収入を得ています。しかし、その収入には多寡があり、より多くの収入を得たい願い、そのために複数の職業に従事したり、あるいは職業を変えることも自由なのは当然のことといえます。

生長の家創始者・谷口雅春は昭和五年に会社勤めをしながら、出版業を始めます。もちろん、出版業を始めると自体には何ら問題はありません。出版した雑誌は「生長の家」という雑誌で、二年後の昭和七年に「生命の実相」と改題され、マスメディアに洪水のように誇大広告を打つことによって読者を増やしていきます。そのことを批判した当時の出版物を見てみましょう。

「魍魎魍魎(ちみもつりょう)の跋扈(ばつこ)すること、最近の如く甚(はなは)だしいことはない。筆者は毎朝必要があつて六つほどの新聞に目を通しているので、迷信鼓吹(めいしんこすい)の『生長の家』の読めば病気が治る云々の全集(生長の家全集) 広告を殆ど毎日少なくとも三日に二回位見せつけられていて気持ちが悪くなる」(『邪教新論』高津正道著)と響(ひんしゆく)を買っています。さらに、金儲けのために出版業を始めた以上は、売らなければならぬ。そのためには手段を選ばない、という姿勢を証明する文献もあります。

医学者・中村古峽氏は谷口のことを誇大妄想症と評し、著書である『迷信に陥るまで』で「或る有力な新聞記者が、谷口雅春にぶつかって、『果たして君の本さえ読めば、君が大袈裟に吹聴している如く、病気が実際になほのかい』と問うたところ、彼は頭を掻(か)きながら、『いや、あれは単に本を売りに出すための方便に過ぎない。本を多く売るために

は、まず多くの人々を集めねばならぬ。多くの人々を集めるためには、何等かの方便を用いなければならぬ。』と答えたそう」と記しています。

ここには宗教者としての良心も出版人としての良識も見受けられず、ただ、金儲けのためなら何をしても構わないという見下げた根性がはっきりと見て取れます。

「ウモリ」のような谷口の生き方

「イソップ物語」の中に「ウモリ」の話が出てきます。ウモリは、鳥と獣との戦争の間、鳥が優勢になると自分は鳥だといって鳥の側につき、獣が優勢になると自分は獣だといって、獣の側につきます。この話は谷口が宗教家と出版業を使い分けて遊泳していた事実を想起させます。谷口自身に語ってもらいましょう。

谷口は、「わたしが思いますのに月刊の『生長の家』を本心に心読してくだされば、ほとんどどんな病気でも治ります」(『生命の実相』第一巻)と世の響(ひんしゆく)を尻目に出版宗教を作りました。これは、新興宗教・生長の家の教義とまったく同じです。教団では、昭和五年に谷口が『生長の家』を創刊した日を立教の日としています。ところが、谷口は宗教出版を宗教設立とは認めません。

「生長の家というもの、そのものが、もともと宗教として出発したものではないのであります」(甘露の法雨解釈)とも「わたしは宗教を製造するつもりで始めたのではなく、ただ会社勤務の片手間に書いた雑誌が奇跡を演じはじめたにすぎない」(『生長の実相』第二十巻)ともいい、商売として雑誌を出版したと述べています。

では、どうして谷口は自身の宗教出版を宗教設立として認めたがらないのでしょうか。谷口の宗教遍歴

の中からその鍵を探ってみましょう。

谷口は早稲田大学英文科に入学しますが、女性問題を起こしたため、養父母から仕送りを断られて大学を中退します。大正三年、谷口は大阪の紡績工場に勤めましたが、ここでも女性問題を起こし、工場長と口論して退職します。大正七年、谷口は大本に入信し、教団機関誌の編集員となります。大正十年、大本は、《天皇に変わって世の中の立て直し、立て替える》と主張したことによって、不敬罪と新聞紙法違反で幹部が検挙され、神殿も強制的に破却されます。これが第一次大本事件です。この事件後も谷口は、出口王仁三郎の『霊界物語』の口述筆記などを担当していますが、翌十一年に大本教団を去っています。その後、心靈科学研究会に関係したり、ホルムスの宗教思想と出会ったり、般若心経と出会ったりしたということになっています。

ここで見逃せないことは、第一次大本事件を経験した谷口が当時の大本教団から何を学んだかということです。谷口が大本教団で見たのは、大本の教祖・出口なおの「お筆先」と呼ばれる稚拙な霊能が出口王仁三郎を中心とするスタッフの手によって膨大な書籍となっていく様子、新聞を利用した広告戦略、想像を絶する莫大な収入、これらを目の当たりにして谷口の宗教屋としての野心が頭をもたげてくるのです。しかし、それ以上に谷口が学んだことは、天皇制国家と対立するような宗教は弾圧されるということでした。

そこで谷口が考えたのが、宗教屋としての旨味(うまみ)を得ながら宗教家としての危険を犯さない宗教出版だったのです。ですから、『生長の家』や『生命の実相』を出版する谷口は、宗教家にもかかわらず宗教家ではないという、まるでイソップ物語のウモリのような存在であり続けます。宗教雑誌を発行しながら当局の姿勢を伺い、谷口が宗教結社「教化団体生長の家」を結成するのは、雑誌発行から十

生長の家とは、どのような宗教か

年後の昭和十五年になります。もともと、太平洋戦争中、谷口は天皇中心の国家社会の実現こそ神の意志であると主張し、軍部による領土拡大を正当化し、軍部に積極的に協力します。その結果、昭和二十三年、谷口は戦争犯罪者となされ、GHQ(連合軍司令部)の命令により、公職追放処分を受けます。このため谷口は生長の家の教主を辞任し、現在は、娘婿の谷口清超が教主となっています。

教えを検討してみよう

前項で述べたように、書籍さえ売ればよいというのが生長の家ですが、宗教の体裁として、一応、拝む対象があるようです。その対象は、〈神〉のようですが、その認識は日本古来の八百万(やおろず)の神々に通じます。もともと、現実には「生命の実相」あるいは単に「実相」と大書きした額を拝ませています。教えは日本神話やキリスト教の聖書や仏教の經典からも取り入れて教えの一部としています。まさに、何でもありの法盗教団です。また、谷口は「神は宮の中におらぬ」(生長の家とは如何なるものか一五)と主張するのですが、総本山龍宮住吉本宮に住吉大神を祀り、崇めています。これも大いなる自己矛盾ですが、谷口のような虚言癖の強い男には、いかほどのことでもないのでしょうか。おそらくは、谷口のいうことを真に受ける方がどうかしているということになるのかもしれない。

さらに、本当のキリスト教は生長の家にあり、本当の仏教も生長の家の内にあり、それを総括するところの実相を教えているのが生長の家だと主張し、故に、万教は帰一すべきだと勝手な論を振りまいています。また、「先祖伝来の宗教を大事にしよう」「今までの宗教は変えないで」とのキャッチフレーズで布教する生長の家

は、教祖の谷口自身がそれぞれの宗教の教えの内容、高低、浅深を知らぬ無知な宗教屋にすぎません。

さて、生長の家の教えに神想観というものがあります。一見難しい言葉のようですが、この神想観とは、ひとこといえば自己暗示のことです。理論的瞑想法とか、論理的思念法とか、いかめしい説明を加えています。要は自分に暗示をかけることです。暗示によって晴れぬ気持ちを整理したり、病気や災難までも解決しようとするのが神想観です。その一例を引いてみましょう。

『風邪を引く』と思うならば、その念(おも)いが成就して風邪を引くのは当然のことです。ですからこれとは反対に、くしゃみをする瞬間に『風邪が出た』と思ったら、『風邪を引く』わけのものではありません(生長の家第一巻) 『心に健康を思えば健康が生じ、心に病を思えば病を生ず』(甘露の法雨)

「剣でもピストルの弾丸でも外から我々にうち込んで来るものだと思ったら、それこそ大間違いで、我々の心の内にそれを引きつける磁石があつて……引き寄せるのであります」(生命の実相第一巻)

「病気にかからぬようにするには、……病気の説明の本を読まず、治療法や売薬の広告を読まないようにしなければならぬ」(生命の実相第一巻)

「バイ菌も微生物で、生きている限りそれは神の生命が宿っているから、神の子であります」(生死を超える道)

あきれ返る戯言(たわごと)のオンパレードです。病気にかからぬよう、予防に努力してきたからこそ伝染病も少なくなり、またバイ菌と戦う医療設備が発達したからこそ今日の日本が長寿国になれたはず。医学がすべてではないことは確かですが、これでは医学に真つ向から逆らう教えになってしまいます。

現実の世界から目をそむけ、悪事や災難は単なる妄想に過ぎないと、虚と実を逆転させる教えは大変危険です。また病気は本来的にはないのだと言い切つては、医療を否定するところの社会問題にもつながります。まさに、神想観とは生長の家の教えを象徴する邪義といえるでしょう。

また、谷口は「一切のものと和解せよ」との神示を受けたといっています。これも生長の家では、基本的な教えとなっています。その具体例を見てみましょう。

たとえば、饅頭や砂糖菓子を平気で食べながら糖尿病を治した話。つまり、糖分を敵のように思っていたから糖分が自分を害したのだ。ところが、すべて兄弟と思いつつは、その心が糖分を食べるようになってからは、その心が糖分に通じて自分を害さなくなり、かえって糖尿病が治った、というわけです。そのほか、家ダニと仲良くしたの、寄生虫のサナダ虫と仲良くしたのという話が山ほどあります。

因果を無視した子供だましの作り話もここまですると、誇大妄想的虚言症という意外にはありません。まさに、世を害する邪宗教の邪教たるゆえんがよくわかります。

真実の宗教とは

人は、苦しいことや悲しいこと、また困難なことに出会ったとき、それを解決し克服する方法について思いをめぐらします。しかし、その解決方法を見いだすことは容易なことではありません。

仏法では、生・老・病・死など人間だれもが直面する人生の本質的苦悩を根本的に解決する道を説き示しています。そして、その本質的苦悩を解決せずして、心の幸福はありえないと説いています。

真の幸福とは、観念的なものではなく、因果の道理をもととした正しい信仰によって、自己の内面にある健全な生命を確立し、深い智慧と強い心を養うことによつてはじめてもたらされるものです。

日蓮大聖人は、末法の一切衆生を真実の幸せに導くため、最高尊極の法である南無妙法蓮華経を唱え出されました。その日蓮大聖人の教えを七百年間にわたつて現在まで清浄に誤りなく受け継いできた唯一の教団が富士大石寺を総本山とする日蓮正宗なのです。

私たちは日蓮正宗の信徒として、法道院(池袋)で歓喜に満ちて信仰に励んでいます。どうか、みなさんも真実の仏法と出会つて、かけがえない人生を光り輝かせてみてはいかがでしょうか。

